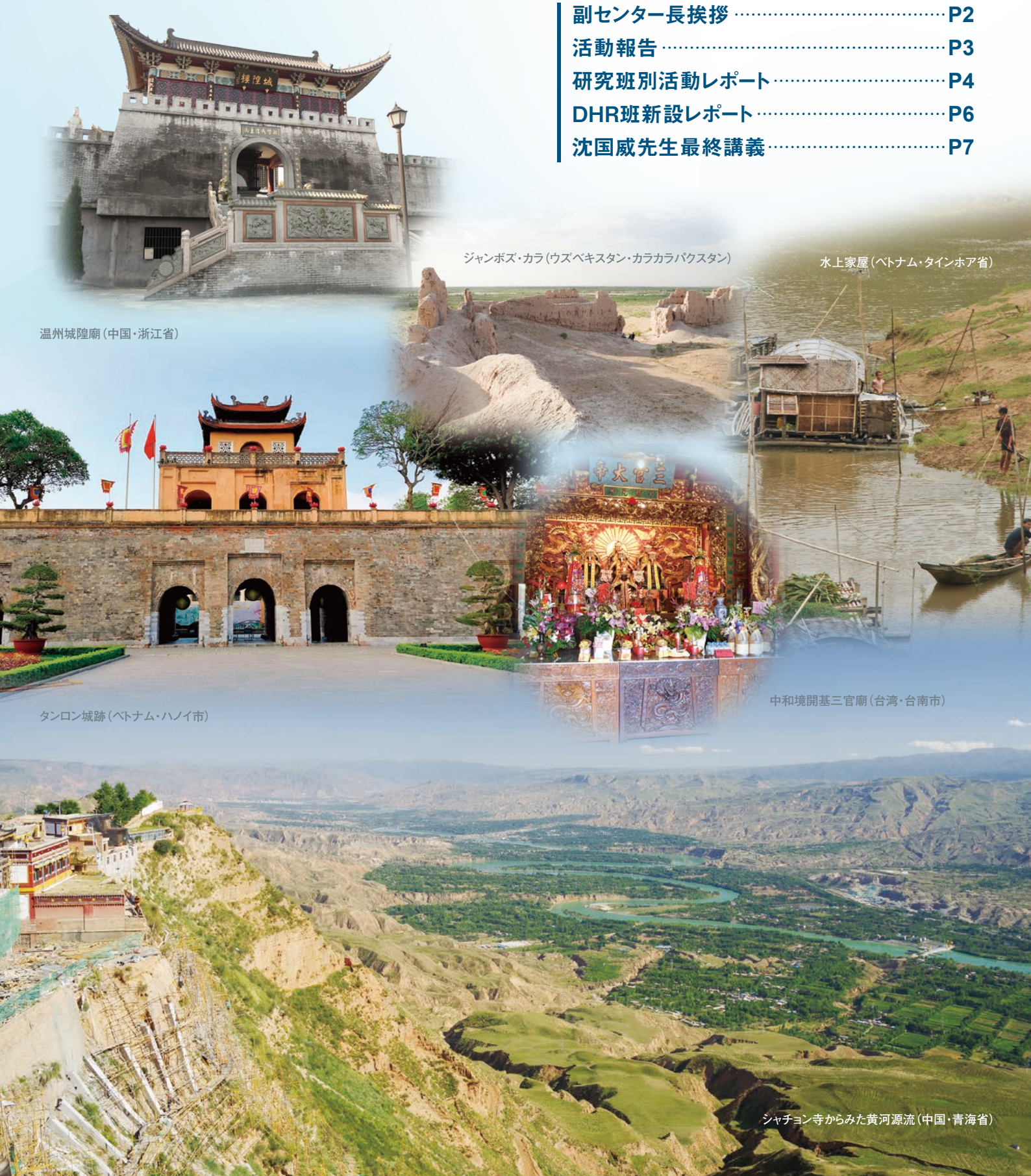
関西大学
アジア・オープン・
リサーチセンター
KANSAI UNIVERSITY OPEN RESEARCH CENTER for ASIAN STUDIES

DRAW YOUR ASIA

KU-ORCAS NEWS LETTER NO7

CONTENTS

副センター長挨拶 …… P2
活動報告 …… P3
研究班別活動レポート …… P4
DHR班新設レポート …… P6
沈国威先生最終講義 …… P7



温州城隍廟（中国・浙江省）

ジャンボズ・カラ（ウズベキスタン・カラカラパクスタン）

水上家屋（ベトナム・タインホア省）

タンロン城跡（ベトナム・ハノイ市）

中和境開基三官廟（台湾・台南市）

シャチョン寺からみた黄河源流（中国・青海省）

副センター長挨拶

KU-ORCAS 副センター長

篠原 啓方

関西大学アジア・オープン・リサーチセンター（KU-ORCAS）は、平成29（2017）年度の「私立大学研究ブランディング事業」に採択された「オープン・プラットフォームが開く関大の東アジア文化研究」にもとづいて開設されました。

関西大学における東アジア研究の歴史は古く、その源流の一つが、江戸時代後期の文政８（1825）年に生まれた大阪の私塾「泊園書院」です。この泊園書院の学統を受け継いで昭和26（1951）年に設立された東西学術研究所は、東アジア研究に基盤を置きつつ、世界的視野に立った比較研究を進めてきました。その一方で、東アジア文化の研究・教育を充実させるプロジェクトとして、平成19（2007）年度に採択された「グローバル COE プログラム」や、平成23（2011）年度に採択された「私立大学戦略的研究基盤形成支援事業」などを次々と展開し、これらを集約しつつ研究のオープン化を図ったのが、この KU-ORCAS です。

KU-ORCAS は2022年度から東西学術研究所の下に置かれ、新たな重点課題として①デジタル・ヒューマニティーズによる東アジア研究の推進、②大学院生・若手研究者によるデータ・サイエンスの活用促進、③外部のデジタル・ヒューマニティーズ研究の取り込み、④東アジア研究のハブ拠点となるプラットフォームの構築、という４点を掲げました。これらを実現するため、保有データベースや独自に構築したデジタルアーカイブを、東アジア・異分野の研究者、企業、自治体、そして一般の方々に提供するとともに、研究のリソースやノウハウ、研究活動のオープン化を進めています。これらを通じて、世界中の多くの人々が東アジア研究にアクセスする場となり、研究面では内外の機関・個人を結びつけて成果を発信するハブ拠点として、日本の東アジア研究を牽引する体制の構築を目指します。

―大学の「知」を社会に還元し、人文学の新たな可能性を開く―それが KU-ORCAS の使命だと、私たちは考えています。

活動報告

2023

- **4月8日開催**　第2回超初心者向けテキストマイニング入門 ―講演と実習―
- **4月28日開催**　ChatGPTって何？ ―その可能性を探る：言語教育研究の立場から―
- **7月12日開催**　国際ワークショップ 近代のキーワードと東アジアの近代化
- **9月30日開催**　言語交渉研究班 第1回研究例会
- **11月10日開催**　言語交渉研究班 第2回研究例会
- **12月8日開催**　第3回研究例会 言語交渉研究班『外国語学習の歴史と諸問題』
- **12月16日開催**　第4回研究例会 ユーラシア歴史文化研究班

2024

- **1月27日開催**　第1回 DHR 班研究集会「東アジア研究データベースの現状と展開」
- **1月26日･27日開催**　第4回東西近代知識移転と言語接触国際シンポジウム
- **2月10日開催**　第5回研究例会 ユーラシア歴史文化研究班
- **2月17日開催**　第6回研究例会ユーラシア歴史文化研究班
- **3月2日開催**　第2回 DHR 班研究集会 漢字文献情報処理研究会第25回研究集会「AI の人文学への活用」

言語交渉研究班レポート

2023年度は3回の研究例会を開催し、外国語学習をめぐる諸問題について研究成果を発表した。

第1回研究例会は、デジタルアーカイブの構築に関するものであり、関西大学増田渉文庫所蔵資料のデジタル化について具体的な構想が紹介された。現在、デジタル化を目標とした資料の整理と作業を開始し、2024年度中に作業の一部を公開することを目標に、取り組みを進めている。第2回研究例会は、石濱純太郎及び石濱文庫に関するものであり、長田俊樹先生（総合地球環境学研究所、名誉教授）に「石濱シューレの人々―財津愛象・西田長左衛門・大島仲太郎」のテーマでご講演いただいた。研究発表では、昨年度に続き、石濱純太郎、石濱文庫のそれぞれについて報告がなされた。第3回研究例会は、「外国語学習の歴史と諸問題」というテーマで、日本語、中国語、英語の具体的な学習者と教科書について報告がなされた。いずれも外国語資料としての域外資料の価値を示すもので、今後さらに発展させていくべき内容であったといえる。

また、言語交渉研究班の内田慶市研究員によってテキストマイニングや ChatGPT に関する入門講座が企画され、多くの参加者から好評であった。

奥村 佳代子
研究代表者
関西大学外国語学部
教授

第1回KU-ORCAS研究例会「増田渉文庫蔵・魯迅関係資料のTEIによるテキスト化プロジェクト」

石崎 博志
関西大学文学部 教授

中国文学者・増田渉は1931年魯迅の自宅で一年にもわたり『吶喊』と『彷徨』の講義を受けている。その際のメモが残っており、東西研でも公開されている。この増田のメモは、魯迅の小説の細部を解読する際の世界的に貴重な資料である。本発表では、現在画像で公開されているメモを、テキスト化して公開するプロセスと、ボトルネックとなっている Viewer について論じた。そして画像+テキストを備えた資料を増やしていくことで、公開資料の利便性向上に資することを論じた。

第3回KU-ORCAS研究例会「御幡雅文の北京官話資料」

内田 慶市
関西大学名誉教授

ここ数年來、官話研究に関する新しい資料が次々と発見されている。とりわけ北京官話資料は目を見張るものがある。今回は最近注目している御幡雅文の北京官話資料について報告を行った。御幡雅文の資料については、昨年度も『生意襍話』という別のものについて報告を行っているが、今回扱ったものは、長崎大学図書館経済学部分館に所蔵されている「官話志白問答」「紹古先生口授京話」「官話今古奇観」の3種の写本である。それらの体裁等について概述した後、それらの写本の主、書かれた時期、更にはそれぞれの内容についても論じた。結論的にはいずれも御幡雅文の手になるもので、言語的には全て満洲語の要素なども含まれた完璧な北京官話であり、北京官話研究に大きく貢献する資料であると共に、科挙制度や北京の風俗習慣等の所謂文化的要素がふんだんに盛り込まれておりそうした面からの研究にも大いに役立つものである。将来的には、これらを影印出版し、広く研究者の便に供したいと考えている。

第2回KU-ORCAS研究例会「大阪大学附属外国学図書館所蔵『満蒙漢三文合璧教科書』について―『満州語教本』との関係を中心に―」

松岡 雄太
関西大学外国語学部 教授

2022年末に大阪大学附属図書館石濱文庫から『manju gisun tacibure hacin -i bithe jai debtelin（満州語教本）』なる一冊の満洲語資料が新たに発見された。この本は大正13（1924）年に渡部薫太郎が大阪外国語学校で満洲語の授業を担当した際に作成・使用した教科書であり、底本は1909年に中国で出版された『満蒙漢三文合璧教科書』の巻一である。本発表では、大阪大学附属外国学図書館に所蔵される『満蒙漢三文合璧教科書』三帙のうち、文献番号「Mn390/18/1～10」に残される書き込みと『満州語教本』の満文日本語訳を照合した結果、両者は同一人物、すなわち渡部薫太郎の手から成る可能性が高いことを論じた。

第3回KU-ORCAS研究例会「幕末英語学習書4点の依拠資料と著作者―『英米対話捷径』『和英商賈対話集』『商用通語』『ゑんぎりしことば』―」

田野村 忠温
大阪大学大学院人文学研究科 教授

幕末に出版された最初期の英語学習書である『英米対話捷径』『和英商賈対話集』『商用通語』『ゑんぎりしことば』の4点について、それぞれの依拠資料と著作者の問題を論じた。従来の関連の研究には根拠を欠く議論が多く、例えば『英米対話捷径』の英語の文例は中浜万次郎が書き、『和英商賈対話集』は蘭通詞本木昌造によって編まれたと異口同音に論じられてきた。本発表では資料の正確な読解と分析により、事実はそれらの通説とはまったく異なることを明らかにした。

ユーラシア歴史文化研究班レポート

2023年度のユーラシア歴史文化研究班の活動は、3回の研究例会を通じ、文書や碑文など、非典籍史料を利用したユーラシア史研究をテーマにした研究成果を発信した。

第1回の研究例会では、毛利研究員「中国遼寧省北鎮市出土遼代墓誌銘群に関する初歩的研究」、吉川研究員「ベトナム黎鄭政権の国家祭祀の変遷」森部研究員「青梅社鐘から見る唐後半期の『府兵制』」、第2回は藤田研究員「テキストとしての後漢石刻」、篠原研究員「墓碑の立碑から見た15世紀朝鮮士大夫墓の朱子家礼受容」、西田研究員「西チベット碑文調査報告」そして第3回は吉田研究員「ソグド語金石文の歴史的解釈：セヴレイ碑文とハラジュ突厥の貨幣銘文」、澤井研究員「勝連城出土のH.1099（1688）年付オスマン朝マングル銅貨とその歴史的背景」、池尻研究員「チベットの書簡マニュアル（yig bskur rnam bzhag）における敬意記号（cher tags）に関する記述について」であった。

森部 豊
研究代表者
関西大学文学部 教授

第4回KU-ORCAS研究例会「中国遼寧省北鎮市出土遼代墓誌銘群に関する初歩的研究」

毛利 英介
関西大学 非常勤講師

中国遼寧省北鎮市は歴代中華王朝の国家祭祀の対象となった北鎮（=医巫閭山）を祀る北鎮廟の存在で有名だが、遼代には顕陵（東丹王・世宗皇帝父子を埋葬）・乾陵（景宗皇帝・承天皇太后夫妻を埋葬）という複数の皇帝陵を擁する特別な地であったことが特徴である。遼代の皇帝陵としては、内モンゴルに位置する慶陵が戦前からの発掘調査により著名である。それに対して北鎮所在の皇帝陵は相対的に等閑視されて来た。それが2010年代から一帯の発掘調査が展開された結果、近年多くの陪葬墓が発見され墓誌銘も出土している。今回はそのような墓誌銘の中から「耶律宗教墓誌銘」（本墓誌銘の出土は1990年代にさかのぼる）と「韓徳讓墓誌銘」のそれぞれ一部分の記述に注目し、検討を行った。具体的には、前者の「渤海聖王」と後者の「猶子之誠」である。そして「渤海聖王」は遼における渤海認識の検討において、「猶子之誠」は遼の対宋関係とそこでの承天皇太后の位置づけの検討において重要な記述であることを指摘した。

第5回KU-ORCAS研究例会「西チベット碑文調査報告」

西田 愛
京都大学白眉センター特定准教授

本発表では、2022年8月に現地調査を行なったバルティスタン（パキスタン東部）のチベット語石柱碑文と磨崖碑文、岩石碑文に関する報告を行なった。これらのチベット語碑文は、古代チベット帝国期、およびその子孫がたてた西チベット王家による当該地域への侵攻を考える上で、重要な史料であると言える。このうち、マンタルにある磨崖碑文については、2019年に調査を実施したラダック（インド北西部）のスマンラ磨崖碑文と、内容および構成が類似することがチベット語録文の比較を通してわかってきた。また、岩石碑文については、バルティスタンのシガル、ゴル、フォンナク、ユゴの4地点における実見調査の報告を行なった。バルティスタンの岩石碑文は、インダス川、シュヨク川沿いに散在するという地理的な共通性のみならず、録文の内容からもラダック地域のチベット語岩石碑文との関連が明らかである。

第5回KU-ORCAS研究例会「テキストとしての後漢石刻 ―『蔡中郎集』所収墓碑へのアプローチ―」

藤田 高夫
関西大学文学部 教授

本報告では、石刻の隆盛期である後漢後半の墓碑のうち、後漢の文人蔡邕の『蔡中郎集』に収められた墓碑を採りあげ、テキスト分析の初歩的考察を行った。はじめに、後漢の墓碑の一例として、蔡邕の手による「郭泰碑」を紹介し、とりわけそこに含まれる情報を概観した。次に、『蔡中郎集』から28碑を選び、底本として Donald Sturgeon 氏が主導する Chinese Text Project のデジタルデータを用いてテキスト分析を加えた。具体的には、文字の共起ネットワーク、1文字および2文字での頻出語の抽出結果などを示した。最後に、後漢の墓碑のテキスト分析のために必要となる辞書作成のステップにおいて、『蔡中郎集』所収墓碑の有用性を指摘し、今後のロードマップを示した。

第6回KU-ORCAS研究例会「歴史資料としてのソグド語の金石文：碑文とコインの銘文を例として」

吉田 豊
京都大学名誉教授

本発表では、ゴビ砂漠のセヴレイで発見されたソグド語碑文を取り上げ、『新唐書』の「回鶻伝」に見える宰相李泌が787年に、当時の皇帝の徳宗に語った言葉の中で言及された、回鶻が国の門に建てた石碑がそれであると論じた。セヴレイ付近は、唐の時代「花門山」と呼ばれており、「国の門」と呼ばれるに相応しい。また現在残された碑石断片から推定される碑文は、高さ7メートルに達する巨石であったらしいことを示した。そしてこれを建てたのは近年中国の学者の于子軒（『唐研究』2022）が想定する第4代頓莫賀可汗（位779-789）ではあり得ず、第3代牟羽可汗（位759-779）の可能性が高いことを示した。別に、8世紀にヒンドゥークシュの南を支配したハラジュ突厥の王が発行したコインに、バクトリア語の銘文以外にソグド語銘文もあることを指摘し、その歴史的な背景も議論した。

デジタル・ヒューマニティーズ・リサーチ班（DHR 班）新設レポート

いま世界においては、人文学が大きく変化しつつあります。デジタル・ヒューマニティーズ（DH）が大きく発展し、それが人文学のみならず、情報学、社会学などの分野にも影響を及ぼしつつあるのです。

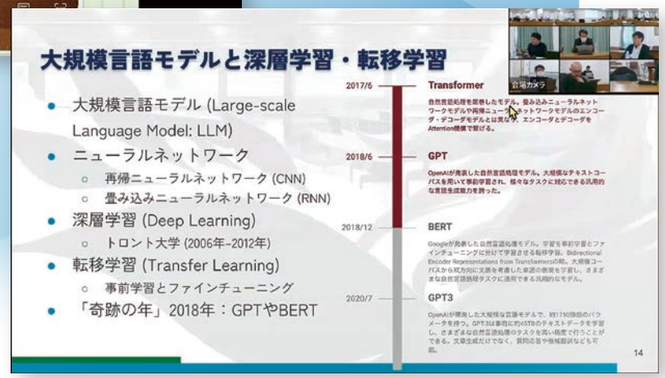
これまで人文学は、ひとりの研究者が、限られた文献資料を使って研究を進めることが多かったです。むろん、その重要性は今後も変わりません。しかし、デジタル技術を背景に、大量データを利用して、グループ研究を進めることによって、これまでとは違う知見が得られることもわかってきました。

今年度、関西大学アジア・オープン・リサーチセンターに新たに設置したデジタル・ヒューマニティーズ・リサーチ班は、情報技術やインターネット技術によるデジタル・ヒューマニティーズの発展の現況を把握し、認識を共有することを活動の目的とします。世界や日本において、デジタル・ヒューマニティーズの様々な試みが行われているなか、そういった情報を分析し活用する場は意外にも多くありません。もちろん、すべての事象を把握するのは難しく、中心になるのは東アジア研究に関わるものとなりますが、関連する領域の多くの研究についても調査します。

人文系データベースとその応用、自然言語処理による古典の扱い、発展するAIへの対処については、特に注意して分析を行う予定です。

センター長・DHR 班主幹　二階堂 善弘

第 1 回研究集会
「東アジア研究データベースの現状と展開」



第 2 回研究集会
「AI の人文学への活用」

沈国威先生最終講義

東アジア文化共同体の語彙的基盤
――わたしの探求史

沈　国威

わたしが学校を卒業したのは1970年７月で、文化大革命の真っ只中であった。高等教育は中止になっていたので、大学進学は５年後の1975年で、専門は日本語と指定され、以来、日本語と縁を結んだ。

大学を卒業したころに文革がようやく終わり、大学院教育もスタートした。晴れて初代の大学院生となったわたしは、修了と同時に北京語言学院に配属され、同学院に設置された大平学校の教務を担当することになった。大平学校は、日本政府によるODAプロジェクトで、中国の日本語教師のレベルアップを図る目的で1980年に設立された。大平学校ではわたしは、著名な学者の様々な講義を聴講することができ、その後の研究の基礎を固めた。

大平学校が終了した後、わたしは日本留学のチャンスを与えられ、大阪外国語大学と大阪大学で勉学した。1991年３月単位取得、満期退学したわたしは、神戸松蔭女子学院大学に職を得た。神戸松蔭に７年間勤めた後、内田慶市先生のお誘いにより1998年４月に関西大学に転出し、爾来26年、教育と研究に打ち込み、この３月に定年退職を迎えることになる。

わたしの研究は大きく３つのカテゴリーに分けることができる。

（１）近代漢字語をめぐる日中語彙交流に関する研究；（２）日中語彙比較対照研究、外国語語彙教育に関する研究；（３）翻訳理論、翻訳語研究。

別々に行ったこれらの研究を振り返ってみれば、東アジアの言語近代化の究明に収斂されていくような気がする。退職後、これまでの研究成果を近代新語、訳語辞書の形で纏めなければならない。そして言語の近代化の問題を東アジア共通国際語としての学習語彙に絡めて考察しようと考えている。

DRAW YOUR ASIA

関西大学
アジア・オープン・
リサーチセンター

NO7

KU-ORCAS NEWS LETTER

発行日　2024年3月29日
発　行　関西大学アジア・オープン・リサーチセンター
〒564-8680　大阪府吹田市山手町3丁目3番35号
TEL:06-6368-1834　E-Mail:ku-orcas@ml.kandai.jp

KU-ORCAS WEB SITE　X　Instagram　Facebook　YouTube